



No.8

2024年8月23日

# Newsletter

日本遺伝性腫瘍学会 / The Japanese Society for Hereditary Tumors

## 目次

### 学術集会開催報告

第30回日本遺伝性腫瘍学会学術集会開催報告	n1
学術集会トピック&感想	n1
最優秀演題賞受賞報告	n3

### Topics

30周年記念事業について	n4
「遺伝性腫瘍症候群に関する多遺伝子パネル検査 (MGPT) の引き」について	n4
お知らせ	n4
編集後記	n4

## 学術集会開催報告

### ◆第30回日本遺伝性腫瘍学会学術集会 開催報告

下平 秀樹

第30回日本遺伝性腫瘍学会学術集会会長  
東北医科薬科大学医学部 腫瘍内科学教室部

2024年5月31日(金)、6月1日(土)の2日間、仙台国際センターにおいて「更なる飛躍を目指して～ For further progress」というテーマで第30回日本遺伝性腫瘍学会学術集会を開催させていただきました。参加登録人数は1,309人、そのうち現地参加は約600人と多くの皆様に仙台に来ていただき、とても活気に満ちた楽しい雰囲気の学術集会にすることができました。

今回は30周年の記念すべき学術集会であり、30周年記念理事長講演、特別講演、シンポジウムが企画され、本学会の黎明期から現在の活動まで幅広くご講演していただき、歴史を振り返りつつ、将来への展望を議論することができました。ポスター会場には30周年記念展示として学会の軌跡や遺伝性腫瘍に関連した出来事を記した年表やスライドショー、資料展示を行い、多くの皆様に閲覧いただきました。

### ◆学術集会トピック&感想

#### ▶ 遺伝医療

植野さやか

藤田医科大学医学部 先端ゲノム医療科

本年の学術集会のご発表のなかで、遺伝診療というテーマからとくに印象に残った演題をご紹介させていただきたいと思います。遺伝性腫瘍の診断にかかわる遺伝学的検査・遺伝子関連検査が広く日常診療のなかで行われるようになるにつれ、遺伝診療の課題やハードルが明らかになってきており、医療機関ごとにさまざまな取り組みをされていました。

亀田総合病院の大高先生からは、多医療機関での電子カルテ共有についてのご発表がありました。がん診療においては地域医療連携が広く行われているため、治療後のフォローを行う医療機関と遺伝診療を提供する医療機関が別々になってしまう可能性があります。腫瘍の発生する臓器が複数にわたる場合には、臓器ごとに別々の医療機関を受診する必要が出てくることもあります。電子カルテを共有することにより、医療機関同士で臨床情報や検査結果が共有できるだけでなく、受診者の思いや考えについて詳細に記された遺伝カウンセリング記録を共有できることのメリットは非常に大きいと感じました。セキュリティ上の制約や費用面での制約があることが課題としてあげられていましたが、今後の発展が期待されます。

広島市立北部医療センター安佐市民病院の恵美先生からは、医師の育成についてのご発表がありました。がん診療のなかで遺伝性腫瘍診療に向けた実践的な教育・啓発を行っていくためには、医

海外招待講演として、Lynch症候群の原因遺伝子がDNAミスマッチ修復遺伝子であることを解明したカリフォルニア大学サンディエゴ校のRichard D. Kolodner博士にオンラインでご登壇をお願いし、DNAミスマッチ修復機構に関する最前線の研究成果をお示しいただきました。HBOC、がんゲノム、倫理、基礎研究、遺伝性大腸癌の5つのシンポジウムに加え、昨年から引き続き遺伝カウンセリング学会との合同シンポジウムも開催し、依頼演題数は48演題、公募演題数は247演題と皆様による多くのご発表、また活発なご討論により大変充実した内容の学術集会になりました。市民公開講座では「ゲノム医療～私たちの未来～」と題して医療者、患者、行政の視点からゲノム医療の解説があり、70人の皆様にご聴講いただきました。

記念すべき第30回を仙台で開催できましたこと大変光栄に感じております。ご参加・ご発表いただきました皆様、患者・当事者会の皆様、協賛いただきました企業・団体の皆様、ご支援・ご協力いただきました理事、評議員、会員の皆様に心より御礼申し上げます。

医療機関ごとに一定程度の医師数が必要となりますが、十分な医師数が確保されている医療機関ばかりではありません。そのようななかで、実践的なコツを解説した教育用動画を作成して人材育成に活用するという新たな取り組みでした。たとえば、費用面での負担を感じている受診者には高額療養制度の活用を提案するなど、明日からの診療にすぐに役立つことができそうな内容が詰まった動画になっており、今後さらに広く教育へと活用されることが大変楽しみに感じるものでした。

本学術集会は30周年の記念集会でもありました。基礎から臨床まで幅広く盛りだくさんのご講演やご発表があり、またこれまでの30年間の歩みについてのお話も傾聴できました。家族性腫瘍研究会から現在の日本遺伝性腫瘍学会に至るまでこの学会を支えてくださった先生方の情熱を感じることができ、加速度的に飛躍していく遺伝性腫瘍診療に思いを馳せる学会となりました。

#### ▶ HBOC 乳がん

中津川智子

東京都立病院機構 都立駒込病院外科(乳腺)、遺伝子診療部

青葉城の麓での第30回学術集会は、まさに青葉がそよぐ季節の開催となり、ジャケットでも暑いと感じず、シャツでも寒くはない、とても気持ちの良い気候となりました。

「日本遺伝性腫瘍学会」の関係者の皆様、改めて30周年おめでとうございます。1994年に「日本家族性腫瘍研究会」が宇都宮謙二先生を会長として発足してから、「日本家族性腫瘍学会」

を経て、「日本遺伝性腫瘍学会」へと発展いたしました。当初は大腸癌研究会の研究活動の一環として開催された歴史がありますが、現在の演題内容は消化管腫瘍、小児がん、婦人科腫瘍、乳癌、骨軟部腫瘍、内分泌腫瘍、がんゲノム医療と多方面にわたります。

特別講演、30周年記念講演およびシンポジウムでは、まだ遺伝性腫瘍という分野が現在ほど一般的でない時代から、先輩方が積み上げてくださった現在までの研究成果と今後の課題が発表されました。乳癌の分野ではBRCA1遺伝子のクローニングに偉大な功績を残された三木義男先生の特別講演が行われました。偶然なことに、今年はBRCA1遺伝子のクローニングからも30年という節目の年でありました。研究されていた当時の貴重なお話から、今日のHBOC診療と将来の展望までの壮大な内容で、遺伝医療に携わる者として、身が引き締まる思いでした。30周年記念講演では、有賀先生が学会の歩みとHBOC保険診療の変遷、遺伝カウンセリングを含めた患者支援体制の変遷を講演され、まさにここ数年の乳癌診療の大きな変化の中心は、HBOCであることを改めて認識しました。桃沢先生の研究をはじめとして、ゲノム解析でHBOCがさまざまな消化器がんに関連があることが複数の研究で明らかになっています。今年の学会では、胆道癌のがんゲノムプロファイリング検査を契機としてHBOCと診断された症例の報告もありました。参加者が多数の診療科にまたがる本学会を通じて、HBOCは乳腺外科・婦人科にとどまらない、診療科の垣根を超えたチーム医療が必要であることを伝える大変よい機会になっていると思います。これからの本学会の発展を祈念し、自身もベストを尽くしたいと思います。

## ▶ HBOC 婦人科の話題を中心に

吉浜 智子

慶應義塾大学医学部産婦人科学教室

第30回学術集会では、30周年という大きな節目の開催にあたり、テーマとして「更なる飛躍を目指して～ For further progress」が掲げられ、本邦における遺伝性腫瘍をめぐる医療・研究の歴史を振り返ると共に、今後の更なる進歩・発展を確信させるような講演や展示が数多く見られました。なかでも、とくに印象に残ったトピックについて報告させていただきます。

まず、30周年記念シンポジウムの中で、岡山大学の平沢晃先生が「婦人科領域における遺伝性腫瘍」について講演され、おもにHBOCとLynch症候群の診療について日本における歴史を解説されました。講演では、新聞記事の切り抜き等も紹介しながら、初めてのRRSOが実施されるまでのご苦労や、アンジー効果もあって日本社会の認識が変革していった様子をドラマチックにご解説いただきました。講演を拝聴して、いまのRRSOをはじめとするHBOC診療は、これまでの先生方の多大なるご尽力によって私たちにバトンが渡されたのだということを改めて認識し、このバトンを次世代につなげなければならないと襟を正す思いでした。

また、シンポジウム1「HBOC診療の進歩と課題」の中で、東北大学の湊純子先生が「RRSO後の身体的・心理的影響」について講演されました。講演では、RRSOによる外科的閉経が及ぼす影響について、身体的・精神的症状の経時的変化を観察する前向き研究を実施され、その結果を詳しくご説明いただきました。講演を拝聴して、RRSOの「卵巣癌の予防」という側面のみならず、エストロゲン欠落による身体的・精神的変化についても多面的に評価を行う重要性について学ばせていただきました。

その他の講演も拝聴して、今後MGPTの普及や保険診療拡大等に伴い、本学会の重要性・必要性はますます増していくと感じました。本学会の開催期間中に同じ仙台市内でポケモンGO Fesが開催されていましたが、学術集会会場にもたくさんの現地参加者が集い、ポケモンの熱気に勝るとも劣らない会場の盛り上がりであったと感じました。

## ▶ 遺伝性大腸癌の topics

鈴木 興秀

埼玉医科大学総合医療センター ゲノム診療科/消化管・一般外科

第30回の学術集会は、遺伝性腫瘍学会や社会の更なる発展とともに、東北地方が復興から発展へと飛躍してほしいという願いが込められた「更なる飛躍を目指して～ For further progress」をテ

マとして、宮城県の仙台国際センターで開催されました。学術集会期間中、仙台では世界的イベントも開催されており、たくさんの人で賑わっていましたが、学術集会会場も多くの会員が集まり熱気に満ちていました。

第30回の記念すべき学術集会としてさまざまな記念公演や展示も行われ、学会の歴史や諸先輩方の貴重な経験や知識に直接触れる機会に恵まれました。色褪せることのない遺伝性腫瘍に対する熱い想いが脈々と受け継がれているように感じました。学術集会会長の下平秀樹教授とスタッフの皆様には、貴重な経験を得る機会をいただいたことにこの場を借りて御礼申し上げます。

遺伝性大腸癌の領域ではシンポジウムが企画され、九州大学大学院理学研究院の高橋達郎先生、九州がんセンター臨床研究センター腫瘍遺伝学研究室の織田信弥先生からミスマッチ修復メカニズムに関する最新の研究を紹介していただきました。遺伝性大腸癌診療のアップデートとしては、産業医科大学第1外科の平田敬治先生からは家族性大腸腺腫症(FAP)、国立がん研究センター中央病院内視鏡科の山田真善先生からLynch症候群について本年改訂された「遺伝性大腸癌診療ガイドライン改訂2024年版」をご解説いただきました。さらに、群馬大学医学部附属病院光学医療診療部竹内洋司先生からはFAPにおけるIntensive Downstaging Polypectomy(IDP)について、京都府立医科大学大学院分子標的予防医学武藤倫弘先生からはがん予防医療時代の到来を見据えたLSの化学予防臨床研究についてご解説いただきました。

一般演題においては、MSI-H大腸癌における腸内細菌に関する報告や1,000例以上のユニバーサルスクリーニング結果など、基礎から実地臨床まで幅広い魅力的な発表が多くありました。さらに、遺伝カウンセリングや多職種連携をテーマにした発表も多くあり、遺伝性腫瘍領域におけるチーム医療の広がりを強く実感することができました。

本学術集会は「更なる飛躍を目指して～ For further progress」というテーマにふさわしく、諸先輩方の遺伝性腫瘍に関する知識、経験および遺伝性腫瘍にかける思いや情熱を受け継ぎ、将来に向けて大きく飛翔するチャンスを得ることができた素敵な学術集会であったと感じました。

## ▶ HTC の立場より

内田 恵

兵庫県立大学看護学部

記念すべき第30回の学術集会は「更なる飛躍を目指して～ For further progress」をテーマとし、仙台市で開催されました。13年ぶりに訪れた仙台の地は、地下鉄路線の新設によって駅と会場が直結して大変便利になり、イベント開催中の仙台駅周辺は大変多くの人で賑わっていました。今年も全国から遺伝医療、がん医療に携わる専門家が一同に集い、大変有意義な意見交換の場となりました。遺伝性腫瘍診療に携わる限りは学術集会参加を継続し、情報のupdateや人的交流を継続したいと思います。

私は遺伝性腫瘍コーディネーター(HTC)の立場から、印象に残ったセッションの一部をご紹介します。まずは、30周年記念の講演、シンポジウムを拝聴させていただき、本学会の歴史や先人の方々が築かれてきた功績を再認識するとともに、身が引き締まる思いになりました。会長企画2「がん医療と遺伝医療を多職種でつなぐ」は単位認定セッションであり、いずれのご発表もHTCの活動を行っていくうえで大変興味深く、示唆に富む内容でした。愛知県がんセンターの高磯伸枝先生は、遺伝カウンセリングにつながる機会が多様化している現状をふまえ、認定遺伝カウンセラーと看護師の役割を対照しながら、遺伝性腫瘍と向き合う患者や血縁者の価値観を尊重し、人生の中で支援の機会を継続することの重要性を示されました。新潟県立がんセンターの三富亜希先生は、がん医療と遺伝医療をつなぐリンクナース育成の取り組みと、若年発症でBRCA病的バリエーションを有するトリプルネガティブ乳がん患者の事例を通して、施設を超えた多職種協働の成功例をご発表されました。がんと遺伝の両側面から患者のニーズを包括的に拾い、多様な状況を理解して生活の先を見据えたケアを継続するためには、看護の力が重要であると示していただきました。

本学術集会で学んだことを明日からの実践に活かし、今年のテ



マである更なる飛躍を目指して、がん診療と遺伝診療をつなぐ役割を担っていきたくと思います。

## ▶市民公開講座「ゲノム医療～私たちの未来～」

安田 有理

石巻赤十字病院 遺伝診療課／認定遺伝カウンセラー

学術集会2日目に、同会場で「市民公開講座」が開催され、東北大学大学院医学系研究科乳腺・内分泌外科学分野の多田 寛先生とともに座長を務めさせていただきました。

本公開講座は、第30回学術集会および日本遺伝性腫瘍学会学術教育委員会による主催、厚生労働科学研究費補助金がん対策推進総合研究事業「ゲノム情報に応じたがん予防にかかる指針の策定と遺伝性腫瘍に関する医療・社会体制の整備および国民の理解と参画に関する研究」班およびNPO法人東北臨床腫瘍研究会による共催、宮城県の後援により開催されました。

今年は現地参加のみ、また同日仙台市内で世界的に人気のゲームイベントも行われていたことから、「どのくらいの方にお越しいただけるのか？」ととても不安でしたが、70名の方にご参加いただくことができました。

本会は、はじめに会長の下平秀樹先生に開会のご挨拶をいただき、続いて下記の3名の演者の方々によるご講演、そして最後に会場からの質問への演者による回答という内容でした。

講演1「遺伝子、ゲノム、そして遺伝性のがんのおはなし」

埼玉県立がんセンター腫瘍診断・予防科 吉田玲子 先生

講演2「患者の立場から」

ハーモニー・ライン（家族性大腸ポリポーシス患者と家族の会）

土井 悟 様

講演3「がんゲノム医療に係る国の取組について」

厚生労働省健康・生活衛生局がん・疾病対策課

千葉晶輝 先生

いずれのご講演もとてもわかりやすく、ユーモア溢れる内容で、集まった質問内容からも参加者の方が興味をもって熱心に聞いてくださったことがうかがい知れました。また、今回、市民の方々への情報発信の大切さと面白さを改めて認識しました。自身の今後の活動において一般に向けての働きかけにも取り組んでいきたいと思いました。

講演中に会場からいただいた質問（10名）を右記にて共有させていただきます（当日は質疑応答の時間が限られ、演者の方々にはそれぞれ質問1つにご回答いただくのみとなりました。座長として猛省しております）。誌面の都合上、質問内容のみ記載させていただきます。なお、カッコ（【】）内は質問の宛先となります。

〈講演中に会場からいただいた質問（質問紙への無記名記述式）〉

・大腸がんとお酒の関連性（少しでも飲まない方がいい）が一般的に言われていますが、これは遺伝性が関連しているのでしょうか？

【吉田先生】

・医師です。ある機会にがんの病歴のない方に「お金はいくらかかってよいのでBRCAの検査を受けたい」と質問されました。検査施設や方法はありますか？また、その費用は？

【吉田先生】

・がん教育でおうかがいます。とくに小学校の場合、本人と保護者の反響はいかがでしょうか？

【吉田先生】

・1年前にゲノム情報による差別をなくす目的で医療ゲノム法が成立・公布しましたが、なにか変化がありましたか？ハーモニーラインは全国がん患者団体連合会（全がん連）に加盟されていますか？していないとすれば、その理由は？

【土井様】

・現在、受精卵の遺伝子を検査することで特定の遺伝性疾患を持つ子どもを産まないということが技術的には可能となっており、一部の疾患においては実際に実施されています。実施の条件としては重篤な遺伝性疾患に限られていますが、FAPのような遺伝性腫瘍にも適応しても良いのでは？という議論があります。実際の患者さんの立場で、このような技術を用いてFAPのお子さんを産まないという選択肢があることについて、率直な考えをお聞かせいただけますと幸いです。

【土井様】

・社会の中にある差別や偏見によって患者さん・ご家族がショックを受けたり孤独を感じたりしていらっしゃるとうかがって、切実な問題だと受け止めました。一度傷ついた気持ちはその後も心の中に残り続けるのかなど推測していますが、反対にショックや孤独感がやわらぐような場面はありましたでしょうか？そのときに、どんなきっかけでお気持ちがやわらいだでしょうか？

【土井様】

・遺伝子パネル検査が今後、診断や予後予測に対しても早く使用されてくるのが考えられますが、日本国内では保険を使用しやすくしていくためにどのようなことをお考えでしょうか？

【千葉先生】

・なぜ遺伝性腫瘍に分類される病気が指定難病にならないのですか？

【千葉先生】

・MGPTやWGSなどが保険適用下で実装される道筋は進んでいるでしょうか？

【千葉先生】

・名取がんセンターでゲノム研究を行っているかと聞いています。宮城4病院再編により、そのゲノム研究を引き継ぐことが未定で、東北大学病院でも引き継ぎに積極的ではないかと心配しています。これからの宮城県内のゲノム研究はどうなっていくのでしょうか？

【宛先なし】

## ◆最優秀演題賞 受賞報告

第30回日本遺伝性腫瘍学会学術集会にて、下記の演題が最優秀演題賞を受賞されました。受賞された山本先生よりコメントをいただきましたので掲載いたします。

演題：子宮体がんにおけるユニバーサルスクリーニングとリンチ症候群の診断学

## ▶最優秀演題賞を受賞させて頂きました

山本 剛

埼玉県立がんセンター 腫瘍診断・予防科

このたびは、第30回学術集会において最優秀演題賞という大変名誉ある賞をいただき、誠に光栄に思います。また、発表の機会を与えて下さった会長ならびに関係者の皆さま、発表にかかわって下さった方々に心より感謝申し上げます。

当科ではかねてよりマイクロサテライト不安定性（MSI）検査を用いて、大腸がんや子宮体がんのユニバーサルスクリーニングを行ってきました。また、拾い上げられた症例に対しては自施設でパネルを用いた遺伝学的検査を実施し、専門家によるバリエーションの検

証・評価を経てリンチ症候群の診断を行っています。パネル検査はISO15189の認定を受け、他施設共同研究として全国の施設に検査を提供しており、これまで1,500以上の検査結果を報告してきました。

今回の子宮体がんを用いた研究では、大腸がんや胃がんでの当科データと比較してMSI-Hの症例が多く、*MSH6*を原因とするリンチ症候群の割合が高いことが明らかとなりました。また、これまで用いられてきたリンチ症候群の拾い上げ基準に合致しない症例が大半であり、ユニバーサルスクリーニングの有効性が示されました。一方で、ユニバーサルスクリーニングにおいて通常はリンチ症候群の遺伝学的検査対象から除外される*MLH1*プロモータ領域メチル化症例からもリンチ症候群が診断されました。さらに、子宮体がんでは腫瘍内で不均一にミスマッチ修復機能が欠損している症例が多い可能性がわかってきています。これらの結果は子宮体がんを契機としたリンチ症候群の診断について慎重に行う必要があることを示唆しており、今後の診断精度向上に大きく寄与できると考えられます。がん遺伝子パネル検査が普及し、多くの人にとって遺伝子が身近なものとなるなかで、これからも遺伝性腫瘍の診療の発展に貢献できるよう努力していきたくと思います。

## Topics

### ▶ 30周年記念事業について

石川 秀樹

30周年記念事業委員会委員長

京都府立医科大学 分子標的予防医学

仙台で開催されました第30回学術集会期間中の2024年5月31日(金)の午後に30周年記念の式典が執り行われました。まず、第2代理事長の樋野興夫先生が座長で、現理事長の石田秀行先生による「30周年記念理事長講演 日本遺伝性腫瘍学会の歴史・現状と展望(2024)」の講演があり本学会の30年の歴史とこれからの展望をご紹介いただきました。次に、石田先生が座長で、三木義男先生による「日本遺伝性腫瘍学会30周年に思う 一字都宮先生との出会い、そして遺伝性腫瘍研究の道へ」の講演にて、APC 遺伝子やBRCA1、BRCA2 遺伝子の発見のようすなどを詳しくご紹介いただきました。そして最後に、私と青木大輔先生の2人の副理事長が座長で30周年記念シンポジウムが開催されました。シンポジウムでは、黎明期に本学会を担ってこられた第3代理事長の富田尚裕先生、野水整先生、数間恵子先生が最初のころの学会のようすをご紹介いただき、婦人科は平沢晃先生、乳腺外科は有賀智之先生、内分泌科は櫻井晃洋先生、消化器外科は平田敬治先生、消化器内科は山田真善先生、遺伝カウンセリングは田辺記子先生が歴史と今後の展望をご講演いただきました。これまでの歴史を振り返り、今後の遺伝性腫瘍学の方向性を示す素晴らしい式典になったと思います。

それ以外の事業として、学術集会期間中の学会ホームページにアップされた学会誌(24巻 supplement号)が発刊されました。また、学術集会機間中には展示ブースに遺伝性腫瘍に関する30年間の年表と学会誌やセミナーテキストが展示されました。そして、展示ブースに設置された大型モニターに、これまでの学術集会の様子をスライドショーで紹介いただきました。これらの展示ブースの年表やスライドショーについては、会長の下平秀樹先生、事務局長の小峰啓吾先生に大変ご尽力をいただきました。

この記念式典の様子や年表、本研究会に深くかかわりをいただいている先生方や患者会からのご寄稿、学術集会の様子やポスターの写真などを集めて、30周年記念誌の発刊も予定しています。こ

の記念誌は、製本し、会員の皆様にお送りする予定です。記念誌が届きますことを、楽しみにしててください。

このたびは、多くの先生や関係の皆様にご支援いただきましたことを、心より感謝申し上げます。

### ▶「遺伝性腫瘍症候群に関する多遺伝子パネル検査(MGPT)の手引き」について

統括委員長: 平沢 晃

岡山大学学術研究院医歯薬学域 臨床遺伝子医療学分野

統括副委員長: 吉田 玲子

埼玉県立がんセンター 腫瘍診断・予防科

NewsLetter No. 6 (2023年9月30日発行)のTopicsでもご案内しておりますが、「遺伝性腫瘍症候群に関する多遺伝子パネル検査(MGPT)の手引き」に関しまして、2025年3月の発刊に向けて準備を進めております。本手引きは、遺伝性腫瘍症候群の診療に際して、多遺伝子パネルを用いた遺伝学的検査(多遺伝子パネル検査:MGPT)を実施する医療者と受検する当事者に向けて、検査実施、診断後の対応について協働で意思決定を行う際の支援を目的に作成されております。

当学会の学術・教育委員会が中心となり活動が開始され、2023年11月からは厚生労働科学研究費補助金がん対策推進総合研究事業「ゲノム情報に応じたがん予防にかかる指針の策定と遺伝性腫瘍に関する医療・社会体制の整備および国民の理解と参画に関する研究」班(研究代表者:平沢晃)とも連携し、多くの会員のご協力を得て鋭意進行中です。MGPTに関連する多くの情報が記載された書籍となります。皆様の日々の診療に役立てていただけますと幸いです。

2024年9月にはパブリックコメントを募集する予定となっておりますので、ぜひとも皆様にもご覧いただき、ご意見をいただけますようお願い申し上げます。

## お知らせ

### 第27回遺伝性腫瘍セミナー

#### ■テーマ

遺伝性乳がん卵巣がん

「HBOC診療を臓器横断的に学びなおす」

#### ■オンデマンド配信

2024年9月18日(予定)～2025年3月末まで

- ・遺伝性セミナー委員会委員長: 中島 健 先生  
(大阪国際がんセンター 遺伝子診療部 遺伝性腫瘍診療科)
- ・プログラム委員長: 有賀 智之 先生  
(都立駒込病院 外科)  
小林 佑介 先生  
(筑波大学医学医療系 産婦人科学)

#### ■申込み

インターネット登録(下記QRコードからお申込みください)



\*本セミナーは、遺伝性腫瘍専門医取得後の更新に必要です。  
また臨床遺伝専門医取得後の更新単位として認められています

## 編集後記

日本遺伝性腫瘍学会のホームページをご覧になりましたか?学術集会に合わせて、30周年を記念した遺伝性腫瘍第24巻 supplementが発刊されました。そこで、学術集会の30周年記念シンポジウムのオンデマンド配信を見つつ、学会誌をめくってみました(なんだか贅沢感!)。一つひとつの積み重ねが、大き

な力になるのだなということを実感しました!

正直、目の前の困難なこと(やることリスト)に、気がくじけそうになることもあります。今できることをコツコツとやることが大切だと励まされます。

(広報委員: 宮脇聡子、田辺記子、田代真理)